

第 9 章 総括

「日本語と韓国語の談話における文末の構造」と題し、議論を重ねてきた本研究の流れをこの第 9 章で総括する。

本研究は、日本語と韓国語の話されたことばの談話を成す文のあり方、その存在様式を描こうとするものであった。とりわけ文の最も核心的な部分となる、文末に注目し、文末の構造体を照らし出すことで、談話の中で文がいかにか存在しているかという、文のあり方、すなわち文の存在様式に迫らんとするものである。こうした作業は、「話しことば」を論じ、「話しことば」を視野に入れているかに見える日本語と韓国語の既存の文法論が、その基底においては、実は未だ〈書かれたことば〉のくびきを免れえず、実際の〈話されたことば〉の生き生きとした様相を捉えきっていないのではないかという、言語研究の根幹へのささやかな問いともなりうるものである。

第 1 章では、本研究で用いる最も基本となる術語の概念付けと、本研究の問題意識の底流を成す〈談話分析〉という研究分野が生まれるまでの、ソシュールからオースティンなどを経た言語学の流れの概観を行った。

言語の実現形態としての〈話されたことば〉、〈書かれたことば〉、そして文体としての〈話しことば〉と〈書きことば〉を区別し、〈話されたことば〉の実現単位を〈談話〉と呼び、〈書かれたことば〉の実現単位を〈テキスト〉と呼んで区別した。〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉、〈話しことば〉と〈書きことば〉、〈談話〉と〈テキスト〉といった術語の概念は、〈談話分析〉という研究の、場合によっては根幹を揺るがしうる、極めて重要な作業である。にもかかわらず、研究者によって異なる見解も多くばかりか、しばしばこうした術語が無批判に用いられる場合も少なくなかった。既存の研究は〈話されたことば〉を論じようとして、しばしば〈話しことば〉を論じることで終わっていたのである。本研究では、上記の一連の術語の概念をまずは先行研究から抜き出し、議論を重ね、本研究を支える土台とした。術語の適切で明確な定義づけと互いの区別という作業は、本研究の理論的な根幹を堅実なものにするための出発点でもある。

第 2 章では談話分析の根幹になる談話データの構築について述べた。英語や日本語、韓国語の既存の〈話されたことば〉のコーパスを概観し、そうした中で量的、質的側面

における、本研究の談話データの位置づけを試みた。また、文字化の方法、日本語と韓国語の表記の問題、注釈の問題など、談話総体としての構造から音声による言語表現の微細な実現様相に至るまで、そうした〈話されたことば〉の特徴を可能な限り精緻に表わすための方法を考察した。金珍娥(2003)で提起し、本研究でも展開した〈複線的文字化システム〉はその方法的な柱の1つを成す。こうした文字化の方法や表記についての考察と試みは、〈話されたことば〉の最も根本的な姿を、文字に写すことで、いかにリアルに描き出せるのかという問いへの接近でもある。〈話されたことば〉は、まさに〈話された〉ことばであるがゆえに、いかにそれが音声として記録されていようとも、文字化され、〈書かれ〉なければ、現段階での言語研究の十全たる対象たり得えない。〈話されたことば〉を文字として書き起こすという、そうした営みがまさに〈書いて〉しまうことによって、〈話されたことば〉の豊かさを言語研究が取りこぼしてしまうという、原理的な危うさを秘めているといわねばならない。〈話されたことば〉をいかに文字化するか、つまり「〈話されたことば〉をいかに書くか」こそ、談話研究の最も基本的な考察の対象でなければならないのである。そしてそれは方法論上の課題であると同時に、まさに〈話されるということ〉とは何か、〈書かれるということ〉とは何かを見据える内容的な課題でもある。

本研究の調査のために、異なり人数 160 名、計 80 組のソウル方言話者、東京方言話者の談話を収集し、分析した。

それぞれの話者がただ 1 度ずつしか参加していないこの 160 名の談話データは、〈初対面同士の会話〉と〈友人同士の会話〉の場面別に分け、20 代の男女、30 代の男女、40 代の男女の会話のごとく組み合わせた。これにより、幅を持った世代と性別による言語使用、親疎関係による言語使用を考察しようと試みた。

精密に条件付けられ構築された、こうした本研究の構造的な談話データは、日本語や韓国語についての既存の国家的な機関や大学など研究機関で試みられた〈話されたことば〉のコーパスに、量的にも質的にも匹敵する談話データである。

第 3 章では、談話を分析するのに不可欠の理論的前提である、〈談話の諸単位〉をめぐる問題を論じた。談話を分析するのに用いられてきた既存の談話単位を基礎に据え、その概念をより明確なものにすると共に、〈話されたことば〉をより適切に分析するため、いくつかのデバイスを提起している。

談話を構成する最も基本となる〈文〉(sentence)、〈発話単位〉(utterance unit)、そして〈turn〉を談話単位として設定した。

〈話されたことば〉の実現たる談話においてまず区別すべき単位は、「誰が話してい

るのか」ということをめぐる単位、即ち turn と呼ばれてきたものが、突き詰めるといったい何なのかという課題である。その話者の turn であるとは、〈当該の話者が発話を遂行しているということ〉、つまり〈発話の持続的な遂行〉に他ならない。〈一人の話者が、前後の沈黙や相手の発話により発話を止めるまでの発話の遂行〉、これが turn である。turn とは発話の進行する過程そのものを動態として捉える概念であって、発話行為の単位である。turn が〈動態としての単位〉であるのに対し、文と発話単位が、発話行為の結果として切り出された、〈静態としての単位〉である点で、異なっている。発話単位は音声的実現体であり、一人の話者の turn の中でも、文の切れ目や相手の発話の介入、前後の沈黙により分かちうる単位である。文はどこまでも理論的に抽象された文法的実現体である。

「誰が話しているのか」をめぐる turn の定義は重要であり、turn は文の切れ目の認定にも欠かせない単位である。しかし、既存の研究の turn の定義は曖昧で、あいづち発話などは turn や文として認めないという流れが、研究史上は支配的であった。「発話権」といった考え方や、「その談話の中で今、誰が支配的な話者か」といったことは、発話の物理的遂行である turn の本質ではない。本研究では、上述のごとく turn を発話の持続的な遂行として定義し、物理的に発話を遂行しているかどうかという点で turn を見据えることによって、あいづち発話も十全たる turn を成すのであり、十全たる文でもありうることを明確にしえた。複数の話者が構成する談話にあっては、発話が共存することは、例外的なのではなく、むしろ初期状態 default なのである。既存の研究では、発話として物理的に存在し、談話の流れを構成する極めて重要な役割を担っているにもかかわらず、談話研究にあっては、あいづち発話は turn としても位置づけられず、文としても正面から論じられないという様相を呈していたのであった。1 人の話者が話しているときに、相手がいづちを打つ、それは〈複数の話者の発話が同時に共存する〉という、談話にあっては原理的にしてかつ本質的なあり方の、見事な現れだと言わねばならない。明らかにそこに物理的に存在するあいづち発話は既存の turn-taking 論からはすっぱりと抜け落ちていたのである。本研究ではこうして、談話を構成するすべての発話を残らず談話の中に位置づけることを可能にした。金珍娥 (2003) の turn-taking 論から turn-exchange 論への展開は、こうした研究を支える基礎の 1 つでもあった。本研究はこうした談話の諸単位を明確に区別しつつ、それらを理論的な切り口として、とりわけ〈文〉という単位を中心に分析を進めたのである。

第 1 章から第 3 章までは、〈話されたことば〉の分析のための、理論的、方法論的な確固たる基礎を作り上げる作業を行ったのであった。

第4章では、前章で文を取り巻く理論的前提を確認したのに続いて、今度は具体的に文の中身の問題へと分け入ってゆく。そこでは本研究の主たる目的である〈話されたことば〉の談話を成す文の存在様式、とりわけ文末の構造体のあり方を具体的に描くための基礎作りを述べた。

まず、〈話された文の存在様式はいかなるデバイスで見出せるのか〉という問いを立てる。その解答は、音声的な側面、語彙論的な側面、形態論、統辞論といった文法的な側面、そして意味、機能についての側面の全てに渡って、談話の中における文ということを見据えつつ、可能な限りその全貌を明らかにしうる方法でなければならない。

こうした方法のうちには、いわゆる文法的な観点はもちろん、実際の〈話されたことば〉を〈話されたことば〉として観察する音論的な観点からの照明が不可欠なものとしてあった。音についての関心は本研究のすべてに渡っているものだといえる。こうした音論の支えを大前提とし、伝統的な言語学でもしばしば採られてきた4つの視座から文末を照射した。すなわち、〈語彙論〉、〈形態論〉、〈統辞論〉、〈意味・機能論〉からなる視座である。こうした観点から、とりわけ、当該の〈文が述語で統合されて終わっているかどうか〉と、〈文を終えているのはどのような要素か〉ということに注目した。こうして〈述語の有無の解析〉と〈品詞の解析〉を行った。

変幻自在に動いているように見える、話されたことばにおける文の文末は、一体どのような性質の単語で結ばれるものなのか、文末を形作る単語などの諸要素は文法的にはいかなる性格を持つものなのか、また、文末形式がどのような文法的な形をとっているのか、単語がいかなる品詞により成り立っているのかを探るための視座がこれらである。

第5章からは、談話データを分析し、得られた結果を述べた。まず、160名の話者の発話を構成する文の1つ1つに注目し、それぞれの文について〈文末は述語で統合されているかどうか〉をもれなく調査した。こうした〈述語の有無〉の観点から文を、述語で終わる〈述語文〉と、述語以外の要素で終わる〈非述語文〉とに分類し、それらのあり方を第5章、第6章に分けて述べている。

第5章では、日本語と韓国語の談話データ全体における〈文の総数〉及び、〈述語文〉と〈非述語文〉の総合的な傾向を調査した。とりわけ〈非述語文〉に焦点を当て、品詞論の観点から〈非述語文〉のあり方を照射した。

両言語における談話データは、同様の会話状況や条件の下で、15分間会話を録音し、そのうち5分間を文字化したものである。同様の状況や同じ時間内での会話であるのに

もかかわらず、そこに現われる〈文〉の数、即ち〈文の総数〉は、日本語が 9,072 文、韓国語が 7,105 文で、約 2,000 文という違いが現れている。こうした総文数の差は、日本語と韓国語の会話スタイルの決定的な違いの証明であると言わざるをえない。今回の日本語と韓国語の〈文の総数〉の顕著な違いも、話のスピードなど、いくつかの原因が考えられるが、金珍娥(2003)で報告している〈turn の存在様式〉から説明ができる。すなわち、制限された同様の時間内に、日本語の文の総数が韓国語より多いのは、独立した文が続いている韓国語に比べ、日本語は相手の turn に重ねている発話が多いゆえに、同じ時間でもより多くの文が出現するのである。談話を観察すると、この違いは一目瞭然である。

こうした観察は、turn の明確な規定、turn-exchange 論という理論的な枠組みの構築、そして〈複線的文字化システム〉という方法論的な実践という、本研究で提起したことがらが可能にしてくれているものでもある。

談話データの全体に関して判明した最も重要な、いま 1 つの特徴は、両言語共に文全体に対する〈非述語文〉の使用率が、日本語は 58.0%、韓国語は 53.7%を示し、〈非述語文〉の使用率が〈述語文〉の使用率より高く、談話全体の半分以上を占めているという点である。日本語が韓国語より、〈非述語文〉の使用の比率がわずかに高いが、〈非述語文〉の使用が〈述語文〉を上回るという点では軌を一にする。

この事実は言語研究にとっては極めて重要である。既存の文法は概して、文においては〈主語－述語〉という要素の組み合わせを、少なくとも理論的には、いわば暗黙の前提としている感を呈していたということは疑いえないであろう。しかしながら、〈話されたことば〉にあっては、日本語や韓国語は、半分以上の文は少なくとも〈述語〉、文の核たる〈述語〉で終わらないのである。〈非述語文〉の厳然たる存在というこうした事実は、文法研究の前提そのものをいま一度問い返してみることを、強く迫るものでもある。

また、場面別、親疎別の談話から見ると、日本語は〈初対面同士の会話〉と〈友人同士の会話〉においても〈非述語文〉の使用率が 55%を超えている。韓国語においては〈初対面同士の会話〉では〈非述語文〉が半分を超えている反面、〈友人同士の会話〉では〈述語文〉の使用率が増え、半分を超えているという興味深い結果を示している。

20 代、30 代、40 代という世代別においても、男女別においても、日本語と韓国語共に、〈非述語文〉使用率が半分を超えている。ただ、日本語と韓国語共に、40 代の男性にのみ〈述語文〉の使用率が半分以上を上回っている興味深い傾向も現れている。

それほどに多用されている〈非述語文〉は、それではいったいどのような終わり方をしているのだろうか。本研究はここで〈非述語文〉の文末の構造体の中身に分け入っ

てみることを試みる。品詞論から見た〈非述語文〉の文末は、〈間投詞系〉〈名詞系〉〈副詞系〉〈接続詞系〉〈連体詞系〉〈用言系〉〈助詞系〉に類型化しうる。それぞれの構造体がどのような要素、どのような品詞の単語で終わるかという、形態素分析の過程を経た考察である。

日本語、韓国語共に、〈間投詞系〉で終わる〈非述語文〉の出現率が、〈非述語文〉全体の70%前後と最も高く、その次を〈名詞系〉で終わる〈非述語文〉が20%前後の比率を占めている。

〈間投詞系〉は間投詞が現れる位置によって、「あ」「はいはい」;「진짜요?」などといった〈① 間投詞単独、もしくは間投詞に付属語がついた形〉と、「結果出さないと、うーん」「1 학기, 예」「고생하죠, 뭐」などといった〈② 名詞, 副詞, 接続詞, 用言類など、他の実詞の後に間投詞が現れる形〉に分けうる。

こうして分類してみることによって、②の〈他の実詞の後に間投詞が現れる形〉においては、話者が自らの発話に相づちを打つともいうべき〈あいづちの再帰用法〉、間投詞を文末に付すことによって、文全体を丁寧化する〈間投詞の丁寧化用法〉、文意を和らげ、聞き手に対して直接的な表現をいわば間接化する〈間投詞の緩衝機能〉といった間投詞の3つの機能を提起することができた。文法論、談話研究を問わず、これまであまり議論されてこなかった機能である。

また、〈非述語文〉にあつては、〈助詞〉類で終る文が最もたくさん現れている。〈助詞〉類は事実上、文末に現れることを主とした働きであるとは一般には見ていないわけだが、そうした考え方自体も再考されてよいことも示唆しているのである。また、助詞や終助詞が文末に来る〈非述語文〉において、日本語も韓国語も、格助詞や副助詞などの助詞で終わる文が、終助詞で終わる文より2倍以上の割合を示しており、格助詞や副助詞も文末を立派に担う要素であることを併せて確認することができた。

第6章では〈述語文〉の構造的な型について述べている。

〈述語文〉は次の4つの型に分けうる：

- ① 用言単独、もしくは用言と付属語が結合した総合的な型で終止する型〈述語文〉
(例：卒業しました)
- ② 用言の分析的な型で終止する〈述語文〉
(例：見たことないですか)
- ③ 用言と付属語が結合した分離可能型で終止する〈述語文〉
(例：かかるでしょう。(かかる+でしょう))

④ 用言に付属語が複数結合した付属語複合型で終止する〈述語文〉

(例：個人情報共有されちゃってるかなって感じですね。)

①の〈用言と付属語の総合的な型〉は日本語ではその使用が少ないのに対し、韓国語は相当数がこの型であるという、非常に対照的な姿を見せている。日本語で「助動詞」を認定しているという、文法規定上から来る帰結を差し引いても、面白い違いだといえよう。②の〈分析的な形〉は、韓国語においては、日本語の表現と数を遥かに多く、ほとんどの発話において〈分析的な形〉が用いられているといってもいいほど、多様で数多くの〈分析的な形〉が現れている。③の〈分離可能型〉と④の〈付属語複合型〉は韓国語には現れない、日本語特有の表現である。

とりわけ④の〈付属語複数結合型〉の〈述語文〉は、次から次へと驚くほど付属語がくっついて現れている。その間には「感じ」や「思う」、「する」といった実詞も入るが、それら実詞も付属語の役割を果たし、さらには付属語の機能をさらに際立つものにする役割を果たしているのである。そして、1つの用言にくっついて次から次へ現れる〈付属語複数結合型〉こそ、膠着語としての特徴を遺憾なく示しているものである。

〈述語文〉において、韓国語は〈分析的な形〉による型が特徴的であり、日本語においては〈付属語複数結合型〉が特徴的であるといえる。

第7章では〈述語文〉と〈非述語文〉の境界線上にあるような言語現象を解析した。こうした作業は、分類それ自体を自己目的化することなく、むしろリアルな言語事実への接近するための作業である。この章は、いわば〈述語文〉と〈非述語文〉のあいだを見据える章となった。

とりわけあいづち詞など、金珍娥(2004b)で「機能志向発話」と名づけている文に見られる、「そう」や「ね」などは、述語は現れていないが、〈述語文〉のように振る舞う文がまま出現する。「そう」や「ね」は既存の文法では副詞、間投詞、終助詞といったカテゴリーに属し、いずれも文の述語とはなりえない単語に属している。本研究では、2つとも「間投詞」として記しているのだから、文の述語となりえない品詞という点では同じである。しかしながら、こうした単語で終わる文は、談話の中では、機能的に〈述語文〉であるかのごとき役割を果たしてもいるのである。

また、「とか」、「って」、「なんて」、「ていう(という)」、「みたいな」の類は先行研究では引用の表現として、ソフトな感じを出すために用いられるストラテジーである旨の主張がなされているものである。「とか」、「って」、「なんて」、「なんか」などの種類の要素は、〈詞〉ではなく、〈辞〉の類の「助詞」であり、自立的な要素ではないので、基本的に

用言にこれらがついた述語で終わる文は、形の上では〈述語文〉として扱われる。

しかしながら、「とか」、「って」は、「やってる?」と言わず、「やってるとか(?)」と言い、「ちっちゃいんだなー」ではなく、「ちっちゃいんだなーって」と言う。これらは、「とか」、「って」を付すことによって、後ろにさらに何かがあたかも省略されたかのごとき、〈未だ終止にあらず〉といった気持ちを匂わす文へと転化せしめるものである。あたかも〈非述語文〉であるかの性格を付与するのである。これは決して「する」だの「思った」だの「考えた」だのという単語が「省略」されている表現なのではない。目的意識的に、あたかも何かがいわば〈隠してあるように見せる〉表現なのであり、構造なのである。形態論的、統辞論的には〈述語文〉が〈非述語文〉へと変容するメカニズムを見せてくれるものであり、意味論的、談話論的には、第8章で述べた〈緩衝表現〉として機能しているものである。

また、文法的に、「なんか」は副詞、副助詞、「なんて」は、格助詞、副助詞があるが、「なんか」、「なんて」が文の最後につくことで、「思ってたんですよ」と統合して終らず、「思ってたんですよ、なんか」と述語としての統合性を弱化させてしまう。こうして「なんか」というデバイスに注目するならば、その1文は述語で統合されて終らず、文の最後に来ていた述語が、その統合性を失ってしまうという、劇的なプロセスが浮かび上がって来る。

「とか」、「って」、「なんて」、「なんか」などの、述語の持つ文の統合性を弱化させる点に注目せねばならない。こうした例は、文法の片隅で「例外的な」というような名で放置されるべき対象ではなく、〈述語文〉と〈非述語文〉のあいだに横たわる、極めて内容の豊かな表現、まさに文法が正視して描き出すべき構造なのだといわねばならない。

さらに、「ていう」や「みたいな」のように、終止形の文ではなく、間接的な言い回しの機能を持って、後ろに体言を要求する連体形で終る文がある。連体形の形で文を結ぶことで、逆に未だ文は終わっていないということを示す。連体形はそもそも連体修飾語、つまり文の成分としては修飾語であって、どうしても終止形のような統合性と終結性を併せ持っていない。そうした統合性と終結性の欠如と被修飾語の要求が〈述語文〉を〈非述語文〉化する仕組みを作り上げるのである。

第7章では、「とか」、「って」、「なんか」、「なんて」と共に、「ていう」、「みたいな」など、〈述語文〉を〈非述語文〉する要素を〈非述語化のデバイス〉と名づけた。

日本語においては「とか」、「って」、「ていう」、「みたいな」のような定着している〈非述語化デバイス〉の表現が存在しているためか、「ていう」、「みたいな」など以外の、用言の連体形で文が終わっている形はごく限られている。

一方、韓国語においては「ていう」、「みたいな」ほどに定着している〈非述語化のデバ

イス)は存在しない。しかし、用言の連体形で文を終える文は、驚くべきごとに、日本語より多様な形、すなわち、韓国語の用言の種類である、動詞、形容詞、存在詞、指定詞といったすべての用言の種類において連体形で終る文が現れている。こうした用言の連体形で終る文は、修飾語の性質を持つものであって、述語の統合性が弱化されているものである。本研究では〈連体終止文〉と呼び、〈非述語文〉として捉える。

日本語に見える、本研究が提起した〈非述語化のデバイス〉は、まさに〈書かれたことば〉による文法と、〈話されたことば〉の実現の間の決定的な差異を見せてくれるものである。

一定に定まっている文法の〈品詞〉を書き替え、〈述語〉や〈述語文〉の性質までも変えてしまう、上記のような類の単語を、〈非述語化のデバイス〉として位置づけ直し、さらに詳細に考察してゆくことは、書かれたことばの文法のある意味での限界を超え、話されたことばの文法を構築してゆくための道すじでもある。

そして、韓国語においても、用言の連体形で終わる様々な文の実現は、文を「端的に言い終えてはいない」というような表わしかたとして、ソフトな言語表現のストラテジーともなっているのである。談話の中でのみ現れるこうした文の姿は、今までの文法では少なくとも正面からは取り上げられたことのない言語事実でもある。

また、韓国語では見られない、日本語にのみ現れる話されたことばの自由奔放な個性あふれる言語現象がある。

自立語を伴わず、「ね」、「かも」、「なので」、「じゃない」、「です」、「ませんね」のように終助詞や接続助詞、助動詞などの付属語のみで成立する文と、「らしいですよ」、「たりするんですけど」、「かと思いました」、「もちょっとだけ行きました」のように、助動詞や終助詞、副助詞などの付属語で、文節はおろか、文が始まっている文が日本語には存在するのである。

自立語の「詞」がなくても、助動詞、終助詞、接続助詞などの付属語の「辞」は自立的な要素としても成り立っているのである。これらは相当に自立性が強いと見ることができ、学校文法の「助動詞」といった規定を覆すに足るものを秘めている。

文法はこうした言語事実をを描き出しうる文法でなければなるまい。

最後に第8章は〈緩衝表現〉(buffering expression)について論じた。先行研究では「とか」、「ていう」、「みたいな」、「って」、「なんて」、「って感じ」などの表現を、ぼかしや躊躇、ソフト化のためのストラテジーとして述べている。

本研究では〈一旦終止した文に実質的な意味を持たず、くっついていけば文の緩衝材としての働きをする〉種類の表現を〈緩衝表現〉と呼んだ。「とか」、「ていう」、「みた

いな」など、〈緩衝表現〉に用いられるそれぞれの item を、〈緩衝体〉(buffer) と呼んだ。

「とか」、「ていう」、「みたいな」のような1つや2つの要素で構成される〈緩衝体〉のみならず、「個人情報が共有されちゃってるかなっていうような感じですね。」、「良かったかなとか思ったりしてんだけど。」のように、複数の〈緩衝体〉が重なった〈複合緩衝体〉構造が、とりわけ日本語の談話では頻繁に出現する。

日本語と韓国語のそれぞれについて実例を挙げながら、〈緩衝表現〉を類型化した。

韓国語は「해 가지고」、「한 것 같다」、「하는 게 있다」のように〈分析的な形〉の〈緩衝体〉と、代動詞「그러다」、「뭐」、「그냥」など間投詞や副詞、「-라고 그러다」、「한다 그러다」という引用動詞、「하고 하다」という動詞による〈語彙的緩衝体〉、「하더라」という〈文法的緩衝体〉などが多く用いられている。

様々な形について無秩序に羅列されているように見える日本語と韓国語のこうした〈緩衝表現〉は、実は〈語彙的な緩衝体〉、〈文法的な緩衝体〉、そしてあるいは〈総合的な緩衝体〉といった、厳然たる形式を持っている。そしてそれらの形式が自由に、豊富に現れ、形を造り上げてゆくというシステムこそ、話されたことばの顕著な特徴なのである。このような〈緩衝表現〉はその出現頻度の点から見ても、談話においては極めて重要な役割を果たしているものである。このような〈緩衝表現〉は今後さらに追究されるべき課題であろう。

本研究は談話を成す文の文末の構造を解析し、そのあり方を照らすことで、〈話されたことば〉の文の姿を描こうとした。それはすなわち〈書かれたことば〉との違いを絶えず念頭に置きながら、〈話されたことば〉とはいかなるものか、ということを見据える作業でもあった。また、研究を支える、理論的、方法論的な問題も扱ってきた。用語の徹底した概念規定と談話単位の区別、文字化のシステムの構築などがそうである。

そこから得られた〈述語文〉と〈非述語文〉の分布や類型、〈非述語化のデバイス〉、〈連体終止形の非述語化〉、〈付属語からな文の存在〉そして〈緩衝表現〉などはまさに〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の違いを鮮明に見せてくれるものだといえよう。

〈文〉というものに注目しながら、本研究は〈話されたことば〉の姿に迫ろうとした。日本語と韓国語の文末の構造を探りながら遭遇した、〈話されたことば〉の自由で豊かな言語現象は、想像を超えるほど、光輝くものであった。最後に1つだけ比喩が許されるならば、限りなく広がっている砂漠の白い砂が、太陽を浴びて初めて、目を開けられ

ないほど眩しい光を発するといった光景であった。データを集める段階から、分析し、記述する本研究のすべての段階において、〈話されたことば〉のそうした光景に出会うたびに戦慄を覚えた。そうした光景を言語化し、構造化し、視覚化しようと、つかめるものにしようと努めたが、本研究は、行方を垣間見ることができただけで、その光景をすべて描写するにはまだまだ及んでいない。果てしなく広がり、輝いている砂の一粒一粒を大切に拾っていかなければならない。